御殿様御清書の部

源氏抄

内閣文庫

此雲源合并六帖の物語ゝ古まれ侍ふ以名のみありて巻
ハすゝとゝりまき因教院の乃和ふ少々あり侍よハ紫式部
ふゝ秘して世におこれハ侍ら字治の宮ゝ侍ら其
あハ源氏の表白人仏教ハ菩提涅槃ハ門を加ハ侍ら
とゝりハ此雲源ハ光に侍ら侍ふハきりをゝそれハ侍ら
事ハ極まる所ハ其ハ極まをハ侍ら侍ふ
あにふゝ和と紀ゝとも又或説ふハ山河の源雲かゝれ乃
事ハ式部の筆紀ハ侍ふ人の編侍ふ侍ら山河
の事ハ別紀ゝ事ハ序よゝ雲源乃事ハ一定ゝ侍ら或説
が筆にあゝ侍ふ侍ふ事ハ侍ふ又或説ふ字治十帖も式
部紀ハ侍ふ侍ふ天台ハ六十巻よ表白と
以よ雲源字治十帖合をゝ定しゝ侍ふ侍ふ又源

氏物語の如くうと人をむすびうり雲うれの巻は世にあるさまなく去
世にあれと紫式部とするとかてをちくそ部又或説の如
きハこれ紫式部とし後人の説なり或説ハ源氏物語を見て姫国の後漢書と編さしてたり紫
姫曹大家なりしかもこれ例のあり仏理も才子れ説くを
かなしと知よかるしめれハ経とあしきをとる也源氏の
表ハ後の素戔嗚尊に古改て見れるちとかりわるの
上巻に四十九代法皇あり幻乃巻と十二月晦日に終りて以雲源の
巻ハ五のあるる月一日よりおこりて当年出をる也雲源の并
れ巻ある説よハ八橋兵根花ろん源氏物語巻守とをいまはな
小ハ巻ち八橋人法の師雲雀子八橋とあり巻するに紀ろを
橋人とあり自ひらすまはる紀と同自巻ると八橋ハ

ちとうあ名かをくれさてぐてと法の師とおれ巻よ世に
同き年ハ婦ちれいつまこうと師侍とさてぐうかれ後ち
人くはうあ法へとすり

雲うれ一抄

以巻ハ高紀ろてれ源氏古法の巻に巻上これ
きうちれんおこりて世紀そひきて雲かれのひとと
巻れ月一日より始りて巻上れ十二年忘よあるる年源氏
れ表なぐ光伝とすりのふ年まくきるる
かくてむ月れはこうおこうて
ふ八き式禮をこれの年ようこ面くと宮八をれと

一日うちたれば　正月一日寅れ一点とふんと亥夜後百刻よ
わきてけり寅れ時の一刻ばかりよつ過うちぞ皆ねぶ
惟光ゆかりに惟秀　これひて八乙女れ巻に童ゆく殿とゆう
されうち夕寄れ大臣を大そその君とやうし時よ妹の女房
れ君の許へ初めて文ちらせうもち使とてもり梅枝の巻
小兵衛尉ゆくみちふ近く堀めり蓋れありてまいりし
人ゆく文よかつて千今ゆと源氏の君よちらへたりとあ
侍従俊おく　最新と書ふ侍ゆ源氏物語れ
中よ源氏六人ありて名ハゆ君の内よ今の最新とふハ
源氏の君ゆ君よの海ゆとうかつるきの暁返ひのひ数
おゆ月ゆく寄ゆ列ゆれ海れ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
ふ今とえうれ寄りて代ゆうに絵ゆて作ゆ新ハ

玉ゆ新とのゆうる新ふ新ふあ
ひりゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ車の新ゆ
ろと横ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
新ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
ゆで決ハりよ　紀ゆうゆ月ゆ月ゆ月ゆ
屋ゆ寄ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
ゆふゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
ゆふゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
元日ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
元日ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
ゆに祝ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
めゆ出ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
ゆゆゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ

あんと
あるとあんて
ゆまてゆる
ゆふれゆるゆハゆびたゆんと
ゆれよゆりゆてゆゆゆる夜ゆ
ゆれ位ゆふゆれゆふ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

惟光新ゆんゆふハ正月
ゆれゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
ゆ礼ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
ゆゆゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
ゆゆゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
ゆゆゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ

思ひてよりハ其の御歌の様ありさま心も日本よハかゝりけれ
てれちかふ行やうのことゝ也
示くはなれ侍るべき人ハ　惟秀茂能卿二人にて出給ひけるよハ
よも覚えてもいふかひなき事なれ共あらハれこそあれ
ハいてきんと葉しらるゝ所と　後徳大寺殿也
世のうきて
心中ゆかれたるやうなれども心は中にもよりてかなしき
おさまり申すへき其孫ハ　車法まろつゝ長と云んかや
織田も知りてハ申すへき其事も侯すと也
山のみどく　明石乃君公の祖父中務の宮乃明石の浦に住給ひ
て後乃山里ハ明石乃うへ侍りたるかなしきに隠れ
出家とちまでつる也山のみとも申す　又式説よあふるよ口傳

えらぶハあり　よみ人しらず　ともにおもむきなさそ之
薪をとりたる紙をこびく　佛の因位よ薪をこりか
と汲て法花経紙求のをてりといへり
法花経紙求ていふ事ハ薪こり菜をつみ水を汲て
ごう此ふむも釈へとふかのよる浦れをそしふと
ありこてもいく世ふるかなまれ鹿をも殊へよすとも捉て
唐土にハ魚の名善見律曰鰐魚長二丈餘有四足似鼉歯至利禽鹿入水齧腰即斷廣州有之
韓退之潮州の刺史となりて祭鰐魚文を作れり
其中曰鰐魚據處食民畜熊豕鹿麞以肥其身
以種其子孫
ほこさきとぞもしめ世代のがれて　恵達よ子出家して極

特山に籠り給ふ時拘隣阿鞞摩訶男十力迦葉拘
梨太子とて五人の侍従をそへて御法の助きとし
給ふ後に五比丘となりき後にこの五人は維摩の詞給ひ
ければ彼御らくも我らも二人を毒よりのがれてのちふ一山へ
此の年の佛も十二年乃ちこの五人々には御法のたまけ
彼さ行と此の世に我らと志さひまりく流くへまつらせ
まうきたるのはかりと申す也
此車を六いたくふとすくとけ　源氏の詞之佛法修行の
花見殿はせつるうちは気よりからふくおはしまさんと律
の法に出家は牛る車にいれ給ふ事
あるしま院　朱雀院は三を律して此の世に御後住給ふ
にゆつり花の世の此の世にいかぐおもひて西山の御寺に住を

すぶと云ふ是橿の山里とさへ今あまれ院とは朱雀院の
御事なり
末御
いかばかり御ぐるしく見えさせ給ひとこれにおもひれ
御身のみへここは出家なにも侍らんばかりに北ゆく事と
いふ座世なりのふて　あまれ院は修行の為に出家
くりと給ふ源氏の君は出抱きりしよするやとろぐされ侍ふ
なまけからさられ年ころへのふし
かみにあられとんてそまりのふ　ろうことといたりひふとぶ
兼之座世なりのふ御侍ておもは御院へあふてたくひふ
あまれとかれしおもひ給ひて
すぐくしば　迷しと書きすこやにとやくちす
立のふれどあまれ院のるふなり

まかるしれ見給たるかにれ　源氏の言く金剛経の偈よ
一切有為法如夢幻泡影如露亦如電應作如是觀
是の世に幻れ夢給をされ〳〵何給現と思ひとるへき
すへ月日れいとれふおされ〳〵ふしての心地　源氏の表
此世の事皆すてさせ給ふ人は古人のいと深おほさ別
よすかさもれく仏法者のとかなる理をもとて略
然れ事ふ有よ安閑無事にしておかしされは日れなく光
方子とし羅太卿が詩よ山静似太古日長如少年
是れ世とおりひそもるや　あるれ後れ仏あ源氏の出家
んは出家とれ世の事ふより世給是と思ひそめ給ふよて宮
其出の人をむとらう世れまりふく　あるれ後のん天
下れ政なは源氏の表一人こそ世の事とりふくおかしますと

なり　礼記曰守在海内
山路れ方こそふも　ある人の流山里に延伏しの事ふ家
山外といふ源氏の表いかはられ古抱思ひうりやと是れ
やうふかさしと世給はたくさるすれの事ふ給あよたよ義と思ひ之
いはれまうるこそわかむ山家れおのれる深も深よこれ様れ
あるしき学　まの方よりひとまじ〳〵すてさせての事ふへき比
ふもあらひあるぬやといふ義之怪の事あることよあり惜
れ字無よありけきんと
其極　む運あを海おさ怪報給哀子られて独りかて移ん
今ハ是ても　哲言ひとおこりてれと去んと神よかまず仏
よかけくととふ義にあるし
是のくへたすとハいひ出さし　今より後ハ世ふとの事

ア世と海一世代そむきのれい是ゆへなんと物よう死
やうにあぐんそうしゆの口さんまも口おうたゆしと
仏経法華経と法華経よりゆへ仏ゆへよいと海へれ経ハ
ある事あれと女よりてしていう人ハ法氏の古ゆへよりて
ハ口語さ支へあうれ流おほのゆふ
六源流ようハ　源氏の位ゆうる義と六宗れ出真宗の古流
をかんとして六宗京栖四所流こあはてりてゆはたう
なれ人へをけどへ位ようゆのうり
世れゆうのうゆ也語まて　源氏八方民れをあわるのうく
よおかしけるゆ　漢書可上為皇天子下為物黎民又四
書舞曲日舞二十有八載堯乃殂落百姓如喪考
妣三年四海遏八音

ゆあるうといふこうもあるに　郯君う待曰離之原上草一
歳一枯栄野火焼不尽春風吹又生むり謝
灵運ら義小弟れ謝恵連ゆ春草池塘生と云句を
ちありけ流義ほめくけりよりて見て一篇をあらはせり
謝灵運ら祖父ゆ死をへさ事流義ほうゆたう侍れ白ゆう
ありというり今れい病ようりて死もうゆ常れ習ゆ謝灵運
ら義れ義小弟ゆあるといふ事とうん者ゆたりもあるに源
氏の云ハをれよハりて行うれ
義かうそゆふこいたうん
こうゆせるふとを六宗業平ゆいうくむ月小おうみゆて志れ
てハ義うゆそゆりふ思ひのゆ春ふこと者ゆく義流うんと六宗漢
ゆ事古今伊勢物語小ゆうとう今れい惟喬親王も世流

惟喬親王世流肖て小野小

むらさきの上にも小松よこすりの子をやしなはせ申されてまいりて
并にまつりし小は源氏ハいつよ幾(ごうり)ふして御前の御親(となり)

大将中宮の御せうと　二人からし源氏の御息也大将とハ夕霧
の左大臣の御事母ハ葵上也葵の巻に大将なりて又左大将(え)
も後よ竹河の巻に左大臣に成給へり明石の中宮ハ母ハ明石の
上也之とてくり此巻よ明石にて生れ松風の巻よ母よくして
京へのぼり薄雲の巻に六条院へむかへいらせて紫上ぞ
ひとへ成り若菜の巻よ春宮へまいり給ふ淑景舎(しげいしゃ)といふ三の
の巻に中宮とやうす

冷泉院
源氏の御弟母ハ先帝の姫宮藤壺の女院なり
桐壺の巻の文にかくなすく成りて後よ桐壺の巻に内侍のすけが
巻して位へおりゐて後若採とや也源氏の中納言にてた

つき給ふ時より世のひとくよに冷泉院のゆかりみかどり世よハ御
弟とや世しかど実よハ源氏の御子也といへり薄雲ハ若菜の巻に
后よたち梅の巻に御かざりおろし薄雲の巻よかくれさせ
給ふと三ゆ冷泉院ハ葵の巻に春宮よたち三と成りて小
御即位(ごそくい)若菜下をにとりゐさせ給ふ
おほせも御こころの給ひ流くてあひきん
源氏と冷泉院と 御文よ御中すくよろの事どもの侍るそなく侍るき
あ(ら)せ給まへしと也
ちく宮の御為くならちふ　薄雲の女院源氏の御中癒
小二すりのひの時いたまて源氏の君小御位をもゆつり奉
らんやと何しにてきれのひしよしそくしてうたまへ事延(引)して
今かくうせたる事と欺きおほおぼしめすとく

きりちやうれおやまの峯ふ入月ゑん　たつちやうハおやまといふん
桐壺之内にハ淡路院も紀伊源氏の訪る也と是ろにて紹
きう君よ今ハ雨歎のあまりかく詠　笑のよへる姫へし
おなじいとたきん
いとたせん田舎ふ居ても摘花ぬかくまして子たよおかれハ
うち志きる鳥のこゑいかゞ言さまして
いかにハ後見も笑し鳥の鳴声の音まで泣さへそ出てうきる
むちうかりし　巨多(こちたき)と書おもさ手取りてのかにた
おなじとこちたしといふ　多くハ实の字之園とふかくたんこと
けふさるゝさく
さくハ遠迹(さくさく)と物語と見ゆるに義之れおこさひ
の庭こりおつくりあふ人とおぼす給ふなり

君と志りせハ
あらしの川しもまさハそ人ハ見て俗しく聞君と志りせハさむるまでを
ぬおりむ草の庵
桜むかうの宿よのまにりしみハおすよ紀わ宿さいハ思ハさうしま
采席るふかく尊庵すてぬく　源氏の君とあるすれ院
はりおぞり居のいてむかうひ行ふとし会頌(けいきよ)挙の三字同
志くこぞうしよむし一所ふ集(あつま)る心之る宿山里の住
居なれと源氏の君庵すて取りくおかるしのかま淡るすれ院之
うまつりおもめすらや
後涼院ふも六条院ふとも　源氏の君抱こゝろ山より出て
山のそれゝ乃ハごもりを見て出る人も思しと涼しそう庭の
てれおかうち尊着ぬやかふとおかつゝ時さぞてい事人かたあく

二条院ふいぎのうへとさま〳〵

二條院は法氏の母相童の更衣乃母く後よ苦とうすま也給（り自）分乃れ文ハ紫の上ぎしきりの〳〵書れ程ろ小ゝ自分乃ゝ文ねのゝり

たゝろく乃紙とふいあゝ紙と　ひるれ後乃相

髪とのこゝろしきりふゝ世中紙何今更ふかゝろすゝん

ゝとりこて海り結りんゝそ

移をたよゝうて別ゝゝ自より空ゝ乃紙屋よ移ん云て也ゝ

うゝゝゝくれ流　仏乃紙ふ男れ也ゝて整ゝハゝゝ

仏乃紙おこゝふゝを侍ゝ塞ゝふ法氏の云れ事ゝり

いゝゝ法ゝおゝゝ自ゝゝゝ

この世紙ゝちゝゝれてハ　今生ハ世紙ゝゝゝれい空云

相乃不ゝよ海ゝよい兜ゝよ角にゝん紙こゝ兜ゝ乃れいゝ云

空蝉乃れをえあゝゝめ結りれふゝうたゝゝふ作ふ

と法氏のゝゝふ也

立の物ゝりゝふちゝゝけゝゝゝゝにゝりゝも　此乃史氏宣

乃ゝ大をゝり立大ゝ合を紙生ゝいゝ雑散ゝる紙死と

ふ地ハかゝゝ水ゝゝゝゝゝ史ハあゝゝたゝ氏ゝゝゝこゝふ云ハ

たりゝゝ人の乃ゝりゝゝ大ゝゝゝゝゝゝれいたゝゝゝゝ

云れ実際ふゝゝゝ

法衆一如れさゝゝ　兄一心法界平等にて差別なゝと

ゝゝゝ云会ふ法ゝゝて十界れ依正ゝある也ハ一心の理紙

悟りれれ此微天ゝ変加羅万像ゝれ兄如来法界れ妙

理をゝれゝ実相ゝ如乃大乃小帰ゝゝれゝゝゝ

先ゝゝりて一巻ゝ古心小物紙御ふゝゝの乃ゝ也

人の世に稀なるかなしきゆめなり　あるとき流の古き源
氏の者なりしものふるき帯得たりて後のふる古きと名付
ぬるかなるこゝろとい生死を厭ふ涅槃を願ふとまり涅槃仏性とと
知りて三界の生死をいとひ涅槃乃佛とを求めて廿年
来はかこるもしらずふるく悔りてこれは生死涅槃も同
色会思ふらいとも求ふ為恩根なるこゝろ無とをもて
これは本来仏性実新也と悔りのふく生死涅槃猶如
昨夢と人々の円覚経の文よりかの唯識論日本得
未覚恒處夢中故佛説為生死長夜
意は之ふ為なるれと世中はもるに死時を待てこれ
覚れ之　法氏の古歌へるとは沛の家をもて乙女巻小
朱葉院より行幸の時参りよりまるむろ内侍り

人行くこゝろ行人こゝろ色のふかう梅の花よりこゝ
忘けり是れおとゝ　又今上れ古和子の大臣れ子こし事是
れ大臣あるか小右臣小こたれ右と為で梅よりの歌
小なり行河のようを行ふ

明石乃うへ　入道播磨守娘也播磨なるよりてあり
しゞ任そこと新へのゞ行て明石小く入乃行家
住ろこと氏源氏大臣源方より流されしよ者れ者
小後て明石むこ人きりあれは源氏をたかの姫よか
よしそあの月の中家と庵きれりを後松風の巻
小都へのゞりて桂乃山里より任帝ゝ紙未通女れ巻よ六
条院より帰りて乃古方と方西これられ人々皆ち
なるぬゝ源氏れ者の人にゆしめきるとも

世れあるてさハ　化の字あるてとゝもあるこはそうの化人也
有為の法法ハ幻化てそうの化きてそうとゝ化の字ハ化人ハ
今まゝ〻あるしはのよハ化にすそうの義也
流てゝ水れあり　論語曰子在川上曰逝者如斯
夫不舍晝夜　涅槃経曰人命不停過於山水
一大事れいんえん　法華経曰唯為一大事因緣故
出現於世とゝそう法法実相の妙理を一大事と説
えり此理を法華で妙とそう妙とそう妙とゝ何よ
若第五番ハ　若第五番ハ　花京老僧ハ
何ゝそれ第の名ふもたきうん仏ハ死山ハ留る也よ
白もなく死人乃月れこと　ゝふ　ゝこゝとゝふ常と書う
常ふとゝ何ゝ表必の月ゝ中ハ常ハかて死

照ゝ表ハ小生死即涅槃なりとも（ハ生も死くい
ふ為き死とすとも也
なこそかゝ雲ハ　かゝ雲ハ　かゝ雲ハ
かゝ法民の君ハ　かゝ法民の君ハ　山雲ハ　雲ハ
巻乃名ハ雲法ハ　雲人を月ハ　雲雲を雲ハ準ハ
名の三形を世れかゝこゝなるもおほう　雲上世ハおも也
しハ小生てかハ法ハ人〻雲人のうへとゝあ三形
ゝゝかゝなゝ　雲ゝすゝかゝうゝれとも
みの世ハ松ゝ風の松ハ　法民の表ハ
成覚れゝ成宣ゝゝ也　元ゝ一道乃風吹おこりて松の末
とゝゝねハゝゝ雲の雲ゝて跡乃死ゝとゝ月性なんれ東
ハハゝべて方法ハ郎　ハて方法ハ義をす義人ハ跡なゝ

以仏家より即身成仏し給へし神仙道より仏
法悟り入て仏法より入て
死仙とすりて法をうけ長生不死のさとりにうひ給ふ
すうう山窪に味ふ所に昇玄経日道言神仙成真
自然登天白日騰景上造蒼震と入り按ずるに
天仙地仙乃数ひく楞厳の中より六天のかより仏人たる
て十種の仙人と云ふてうり仏乃成悟りて長生不死の
と形し来仏弟子乃十六羅漢をうめたためおひ
法氏の表れ玄法も仏乃理悟りて生成
法をうけ海ふ死仙地仙天仙地仙
般若燈論曰梵南菩薩等亦名仏佛於中最上
尊故已有一切波羅蜜多功徳善根彼岸故名大仙

といへり法道人は即身成仏とる成天仙地仙とふ
る神形し

少もうそをいはんかたかく　性善品第九

ふりふかおろかなりれはたていんとの堅をなし
立成名者ろ者すう　燒野乃維ふれ仏をすて衆の落
の肉を割片片ふたりふと報ふ国位の時
雉よりり野火れりえ来りしを翅よりをひして火を
消ひ子成生ひりと大智度論より衆の落ん
肉をさこのくにあるこにまし阿含経よあり
仏法ひ今しと神のわるとは火けつ維乃を称の中より
武義ひれ雉よりやいふをとふ煙乃器に焚まふ
衆の落都乃内よこあれて成立ひ成立ひ乃あ

地をえし物きこゆるのたより

秋月山水のふ寓にうつしハ史ハ康乃志こみ志らへなすらん

やりすらかゝてを書と思へるや逢みへ琴乃声をきゝあらん

吹風もやゝりよハそとなふ　　　　罕大経の中に此を敢なすこと

ごとおもよりてハ声をおこし花よられてハ色紙あらハれ

源氏なる紙源氏の志ハ説をふまへて糸て縁く声を

なく物ゆゝ志て述給ふすと號くんなり

吹風乃色れ千種よみ流乃秋の木れ紫深ちれハなすらん

今ハむかしれ事をとなりし　　　　惟秀か心言よありても源氏

の志をおもしまき源あゝて千紀常もいとし出て書れし

むかしれ事業意ろなかりしさて縁り

志りくなんとそもしられん　　　　云こと書て志りくと

なあり漢書汲黯傳曰吾欲云々　注　師古曰猶言

如此々々也　文選李陵答蘇武書曰云々　注呂向

曰云々多言皃也

二たび海こゝ御とひのふと

冷泉院乃御とき……あるせ給ふしやうしめて今文雲

かれしのふと笑ひ給ふ二たひれ世中ようひや

いさ志らすその人よかるいをハ二ゝひ物を思ひをさゝ御

そくられ御と色ゝ有ふ

世かてゝ秋月られめさゝ中ハ衰風をかやこらまそしらん

かこまり風ゝためゝひて　　　　惟秀流しき縁り良頭

醉てなり志つておもひあつしてゆあづる所也

すりつ巻　巻二

雲かくれの弁れ光〻於絵以て名ばかり今上の古意めづり

薫大将乃なり立すふ事さも志るしあしハきり

冷泉院おちて御時なく

足曳乃山へ入されハ雲の以ふせよこり晴ゝ附なす紀

女一の宮　母ハ致仕大政大臣の娘弘徽殿女御と申せみ

さ清て此世よ去いふくまいり給へりかくて女一の宮と慶かふ

こやと前の松ちこれ秀宮女二の宮　御息所ハ髭黒の

おとゝの娘冷泉院女御と申せし竹河の巻よ冷泉院へ参り

まつり一の宮ハ別同光よ生れ給ふ若宮を女二の宮を

こやと前のうと行へるを

なからの世てかほしげなく

ちりこて肩をしはるにたもあれば紙あり世事
をのこれんをてかこれよりこれよりく　冷泉院れいせいの
高位りんく巻れおとすわこうされてとハ口足とをはれこと
世ハくこあんこれ山海へいんよりふハこれかたりあれ
すりこふ名れ巣小卵乃えこで果紙巣ものと云法氏ハ
かく世をのれくめてたれ悔りよりりふをこうやまりを
ありまくこ文こうれ人捨こて古こ病すくハこう命
世法をこうこ知のふとこ
いとあくこれる　敢れ字ありいんじゃふを
人の所小佛乃経こあるこ　あるこふあること以ふ
河く佛乃こうこハ涅槃経曰一切衆生悉有佛性如
来常住無有変易と以こう知くんこ性乃所ハえ文

不生不滅乃佛小くあこ移く法界よみこく自生如有こう
こうくハ性よ海こふて乃自を三東六乃よ流搭こりを不増
不減経曰即此法身流海五道説名為衆生即此法身
修行六度名為菩薩即此法身返流盡源説名為
佛と以こるハこうこり
乃海こりよ世こをハり　知こ名に性具れ三名と以ふ佛
の海れくこの紙こうくこ悔りわくハこぐる行ハこんと海
こりこて文海れハ世こをこりハこと涅槃経曰法佛如
来有二種白法一者慚二者愧と以こう慚愧の二字
こにこぐこと法こう天よこをこぐ地ふこりと云義く人こ
て仏法れ妙理をとハこをこぐこうこ知くんこ海こふハ畜
生ふ門者れを大よ世こをこりこと

世ごとに〳〵ごとに　　ことばかりひとそんと
思ひかへりひとそんと
ようよこそこすれかたらひかへしあれいひそめあふさまる
たれと書くこころをたふさこころをたふさこころを
はもるにそこふ糸れ色てよで　　惟南子曰墨子見
練絲而泣之為其可以黄可以黒
わらう屋をけさ紙　　中上
風やこそ吹当塗れこそすれあるう屋を死人のんう
れこそすれ　　われよれて人乃物屋を死をこでむ
こそとぐりかへ死よれしこそ絵をずやしく左
とわるくわるる
風といふこそ煙乃立出て れこそ海を流て来る
本来空れたる　　不乃八因果法生こそ無朝
と教ふ色八悪取空して大よ仏法乃理ハ遠ク大宗
ふ宗理八法法八色因縁より生じて自性すこと
法界無相の理八虚空ニ満て平等の吉来生
滅乃おなし無思不二迷ハ一ツ也ると成ハ来生
とふ又八第一義空ハ或八般若乃本空ニて名ク
般若乃空智八法佛得乃ハ也法仏実相の理
といふ空八空理考ハ法不変の義法乃ハ日法法
本来常自寂滅相　　維摩経曰成就一切法
而離諸法相
異行乃ものとこ者ハ三世乃佛ハ母とこれ
山乃弁をもて　　世ごとの人乃ハ三世乃佛ハ母とこれ
しはまに　　世ごとの人乃ハ三世乃佛ハ母とこれ

でたりし人なり

法師ばくだよ　山の座主の河内守行法師ばくだよ

法師ばくだよ立れば坐れば法師ばくだよ

親鸞乃市まるずを　法師佛親鸞喜之聯と絵ふ

いと尊とし　洛水流の市人

さそもう人の時市人ばくだよ　洛水流の河内山

座主と河内守ふ

きぐふきぐ問れをしきこてんも　洛水流天子市信よ

おたうもせたのもあり紀羅とあるくもちんよ芋

給ひ　ことに和の人れかとくよ流ふて山を羅陰ふ

とけばめ人閑同と物まあるまり孔雀

動まれみとしみ光のふきるを　女鈴乃宮殿天皇醍醐

天皇なとも至尊といれなひとく世のまりとを出よ

けるわつるたひめふまりて孔雀くよ為ものという

思いて小二孔雀世とて天皇為をを

とを河内皇極醍醐乃釣り今八世をいよ濁り

人もまず〳〵うまれをとりたりとも

やしふがんかうれたづかうむをひこで光ぬるん

天台止観曰煩悩是昏煩之法悩乱心神又忘作煩

念得悩といりたる〳〵仏たよおもしんとするよ四よ八

煩悩乃きづかたよく法ばれかよ欲乃ちがてきば

多平世ばいとひの孔絵事のるかんと思ふ者て

女御ばよちをもうとき為の大智度論曰極楽物

鎖閉繋閉間雖曰雑解猶尚易開女鎖繋人染

着根深無可得脱といへり桎梏枷鎖とハ手かせ足かせ
首かせなとの事也是ハいましめのきつな易からん女の色香の類
小法師かれにハいのちかけて死ぬとも又曰五欲者名為色声
香味觸此之五事禅定正障可欲修定皆應棄之と云り
いつれにもふかきちかひたて世中成わかれをしらぬかなかれ
為人のかゝ将　右仕太政大臣の子也夕霧のおとゝの君ふち
あまた殿上のひと時あひくてもしくておちれ殿京と云り
夕霧の大臣一条の宮にあひかゝとゝ申て又大臣の使かく
なかれておりふれあひしとさくしとなくしくなり
いはくよりて心ちかくなるあらん　次水流れに鏡し
身ふく生れ世にあるきれハ死の末に圍し生ハ何よりして
ゆくる是去らし光欲によりて死して又生れくく甚生

文葉圓に清くれなく遊戯に親しく付念に光欲ハ去るに去り
より志て生ハ去なハ何かのそ清性の妙理をそてに縁に去
たふて去なに成かくのとく迷ハ時ハ煩悩菩提の二道
光明さりて色かへをハ法身般若解脱の三徳となる計
理性人にハ心を禅定に住とし時ハきまんせ流
おほハ心をれなと鏡のことや
おもひとかくておなしく心に鏡し
あひける人もきけん世中心何理いふるへしともおもかれん
きよ宝もなかりられ枝くしおほし
此わや世の煩悩の川京によりまなよくくゝれる心かく菩提のなん
山寺に入おの縁にあまてにもまて菩提くゝやすそ出てなと
まてとくなんとして　黙然とハ心をもいはすて静にゐるをふる事

ぐごをしてまつれたあぐるに小もちゐられとをとろ〳〵さゝぎこの東
ゝをおハせめ〳〵　いよわかりゝ事あれば食のをまれば
いろ事かゝれたるいとをすゝきり不のかゝれるあゞ怪
たゝりの乃田花よりあり〳〵熟瓶として猶宅よへ自ふを
りて法喜禅悦れ食をあゝ称ゝて浴世乃食をあゝ称ゝて
所敢乃おとろ〳〵行ゐゝとゝ
清ゞのいゝ花すゝそりて　山乃庄をなり〳〵
山乃庄をなり〳〵　小戒師ハゝれゝてゝ
あ事ゝれをみゝ法出ゝるゝ
如来宅無苦充満喜可怖畏　文選頭陀寺碑
文曰薩法雲於真際則火宅晨凉　注真際實際也
衣れゝゝ乃むりゝめえゝゝ　法華経曰三界無安猶
法華経文而弟子ゝ以喩あり

夜明ゝ
いゝて衣れむ花知ゝゝん
わゝゝくゝゝゝ　ゝ
ゝよりて法ゝ
ゝゝのゝ
よゝくゝのゝゝ
ゝゝゝ花ゝゝゝゝ
年紀ゝ齢ゝゝゝゝ
大臣小花れ姫夫成　菫四大臣のゝ小花の姫ゝ
ゝ乃ゝ山ゝの乃ゝ　菫小ゝよりて姫夫ゝ
ゝゝゝ法ゝ菫れゝゝ
かゝゝゝゝ　小花小ゝいゝ

ゆづりをそれおとらのひておこうしすまておいてきる紙
むりて還俗せてあのてるとも
いやすしとおぼゆのふ　日比乃和見ひよもゝこうれを
今ふ人と清ゝ者えてのふ蓮のつと
川ゝ乃清ゝ者ゝ見れ潮風いとうらんの四乃もそしかるらん
うちれみと　今とれ中東く朱雀院貴一れちゝ清母ゝ
た大臣れ娘弟春殿女御ゝ可ゝを清ゝ乃ゝ者ゝ
文よゝ和ゝ可ゝの巻ゝ和ゝ信ゝ清ゝ也ゝ可ゝ
みとさ　今とれ后ハ九ゝ和ゝ中ゝ麗京殿の女
御梅殿れ者ゝ今とゝ者ゝ文ゝ和ゝ中ゝ行ゝ可ゝ
薫大将ゝ中ゝ小宮れ姫君ゝ可ゝ中ゝ
ふゝ細ゝ可ゝ中ゝ

中ゝの内清ゝ可ゝ今とゝ后ゝ中ゝ清ゝ可ゝ清ゝ中ゝ源
氏の君ゝ可ゝ中ゝ和ゝ可ゝ中ゝ
和ゝ中ゝ者ゝ也ゝ

二の文東宮ゝ中ゝ可ゝ中ゝ　是ハ二の文れ可ゝ也
ゝ中ゝ河ゝ今とれ一二三の文ゝ可ゝ中ゝ
中ゝ殿ゝ清ゝ源氏の君れ者ゝ中ゝ可ゝ中ゝ一文ハ文ゝ者ゝ
生ゝ可ゝ者ゝ文ゝ中ゝ二宮ハ夕霧のゝ
中乃君ゝ者ゝ和ゝ中ゝ可ゝ中ゝ
ゝ中ゝ可ゝ中ゝ
ゝ中ゝ中ゝ者ゝ文ゝ中ゝ
ゝ中ゝ中ゝ
ゝ中ゝ中ゝ
ゝ中ゝ中ゝ

たゞ[illegible]おろ[illegible]まゝ二の宮とも位れ給へ三の宮とも
御美名をとすゞれ共名も世よこそ[illegible]八市位ハ三の宮自
無位なゝゆゝしき世なり
いそぎ位ゝ[illegible]なる事しゆゑ
と一の宮ゝ[illegible]位ハ法華経一二の高座ハ紀まゝ世
なゝ三の宮ハ譲位ハ逆義せとれ[illegible]
人のおもにもたゝめゝ
まゝ又紀養伯ハ仲雍弟を季歴とそ[illegible]ハ殷
れ改たゝ周の王ハ流ハ[illegible]ハ大王
ハ殷を伐て周の世ハ[illegible]養伯さゝに
逝ゝ位ゝハ季歴と世ハ立ゝ思ゝ[illegible]ハ兄ゝ養
伯ハ家を出れ[illegible]ハの仲雍も文れ心さを[illegible]

今上れ位ゝ[illegible]

ハく[illegible]ハ季歴ハ世と譲ゝ[illegible]季歴れ子
と号ゝそいけ[illegible]周の文王ハ昌のよと愛ゝ是
武王ハ[illegible]時ハ殷の世ハ[illegible]び周の世ハ[illegible]
又のゝさ弟三れ[illegible]ハ[illegible]
譲ゝ[illegible]ハ[illegible]
法ハ乃いす

第[illegible]文法天皇に[illegible]ハ[illegible]す一の
宮ハ惟喬親王とて紀名虎ゝ娘[illegible]
弟二の宮ハ惟仁親王とて[illegible]
[illegible]惟喬のみこハ[illegible]
[illegible]

[illegible]ハとに[illegible]ハ[illegible]
惟喬のみこハ文徳[illegible]惟仁[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

なり〳〵二の宮内侍よりさのふ内侍紙をさして弟の位をこ
ゑふたゝびといひ今上乃内子を三人なり〳〵回服れ又弟ふ
て清てゐ業なれ法如れ出ても例よりくよりなりをこと
三の宮内侍回ゆつりさでまりの事
内侍ゆづ面わうみと后ゐ宮に思ひきりに出ひいよ女なるこ
薫ハ回大后よりのしく　行向の君よ中納言なりまふ
桂大納言ふく大内を兼でゆ君ふく回内侍りすり
右流の内侍より　光源氏ハ為雲れ君よ牛車れ宣をかり
ゆり乙女君よ右近大后よりゆ行の業氣よ右上天宣れ
さる長紙うきのし六条院とゆを世のまつりこと〳〵こうりおこ
なしのつりゆ右大臣流とハ源氏の元れ事と薫ハ院よ
回大后よ如く世のまつりとをゆふよりゆ右流の内侍より

ふきく考きとも又一義うり今上紙さして右流ゆゆ自宣
内侍よ源氏のてハ右流の内侍ゆう添くゆてにきく考と
二条乃きの内侍
大后乃姫れ〳〵ふく後角れ大条乃回服れ妹く通首中
条と兵ゆ後角れ君よ自宣よりて早蕨れ君よ二条
流ふむ乃ゆ君ゆ乃右ゆ中の条こて右流ゆ〳〵ゆ
自宣内侍ゆつれ乳母君れ世ゆこてまりの事と
今て世ゆ乃れ古こ乃ゆれとゐれ話き
乃ふ言ゆ乃ゆ流〳〵ゆ侍と女御のゆよも元て
和ゆふ后ゆとも　これい改紙の地
后大后れ六の条　夕霧六の条ハ母を惟光ゆ姫君れ壺の内
侍之やとりまれ世ゆ自宣弟ゆよまつりのひと兼

香殿(きやうでん)乃女御とぞ申侍る也
式部卿の娘なり　蜻蛉(かげろふ)式部卿乃宮は源氏の君にハ次第
院にも御弟之宮なれバ世のおぼえゆゝしけり姫宮ハ
君にておはしませバ父式部卿宮ハ世を行ひて後まゝ母の北の方
ある宮(むすめのみこ)が思ひのまゝにもてなし姫君ハ御母宮やうしなハれし
くだりて姫宮乃一条の宮にはおはしまさせ給ふ宮の君
とかくして薫大将にまかせけるが源氏を後(に)
きこしめして　白宮ハ御弟之
わかんどほりなれバ勿論まいらんとて　薫大将ハ此宮の君よりも
法師ともをせよのゝ殿上人宮法ハ思ひの外の御殿大将
兵部卿なんどしのびつゝおはしまし宮よ思ひまいらせ給ふとて
そが初とぞまいらせけり

みことハいとわ御事とハ　薫よりこれならひ事を情なき事
よそのひとの宮にておはしませば、つくいひわたる事を思ふことぞ
思ほしまへりて薫のおとこまひも惜しみ給ひけるとや
ぬしく思えんじ給はず　怨(えん)の字也うらむるさまなれバ
さのみ心もとなきみかどんとて
あくて此程にわかれ君心をもうつおぼえ
宮の君の勝り薫乃中将一人出来のすゝ
おもふ心をゆるさるべからず心をさし心の中の思ひをなし給
薫も宮の君よりものこ深く心をさしハおす思ふ宮の給
心のたなびくかひなく思ひけりは心也何しよぞ
君ハうつろふ心をもさへしつゝずる也
宮ハ御いとしき事いでたりぬる　薫ハ御心みさへなき

うへよりの恵さうへ出来されたいと者さうへ中絵てん
めひとれたる又立て紀のもなりとも
引きにて
ありねるんこうてあひこの孫たりの小紀まてて立てよ
三の文れくゝ叶り　白文とて小市位より紀絵名れいとる紀
宣旨にうるべく紀女房法なりの紀の恵を用いる絵
んとゆり絵者り　宣旨よりるる人紀人なる紀なりよ恵
ひぐんとわりごん〜てアいいもの文と
女二の言の東乃君をとゝぬさて文位て
今とれ女二の言ゝ毋ハ者童れ世御なり寧本の
者ゝ四乃ちさゝふくゝゝ大れ紀年よりゝ
花香会れ藤の袁乃日一品乃文紀大将なのと
たるり女二の文と内かゝちすべてよハあゝ行

婦言よハゝ母べくとおゝ絵ゝすとも東の恵
とハ小野乃姫恵の事ゝ今ハお書女二の文
と小野れ姫恵芸れたて一ゝにりてなりの文
なり

さてゝ人　抄三

巻と云ようてゝ花とも花とも云ふ歌
名あり巻をとおなす所の小させよ別字時うあるよ一定
さてゝ色の雲泥世をこれすべすて白玉位(たまのくらい)讓り
うを給つる事ようこと世はうれまをそうり
四乃みとゝ　白玉かくれ位よ法花ひて弓さ海なう
ひうえおうすうよ法華ひてハとおうこ聞まひてうれ笠
の上おうて四さうこひ行ん也
法ようちあきおをする中ふと　今上のおうよハ九人
おうあう中よ四の家と皆屋の家と多夜殿く女二の家
ハ花童れ業の法ようこ也をれ古人を四の中高れ
法殿小く笠と花古ひあ古ひま孫ひて家うまれ兵中小

白玉と一品乃家と別ていとあうこひく笠の上聞
ようこそ也
かうれをみよ　笠上いうこ出れ碧ようこうてこそぶ
てこ白ひとうう
家
おをしんもなきれを人をあくにうるてふ事り
四ひてみ法ひ涙も年ひれをかあるうひよ者り
ちをこうひ比と　笠のこうひのひ比也
おひうれひでこう　ひこうう竹むこれのこ白宮よ
小遠云あり事紙おほ　おのふと也
二宮法れ花こもかるみよう
今業
根よこ乃ひ乃ひれ云ひくハ兵毋の花紙かこと八こよ
佛ふとをてまうれこよ

おぼしたてまつりそめ給ふ三世の仏よ花とうてまつり
はなしたてまつるなり
於医師ほとゝぎす結ぶ流るゝ水のうたゝねの
うちうそぶきのふ　嘯のそらうそふくことをめり　雑字解話
曰嘯吹声也　詩曰其嘯也歌　事文類聚曰諸葛亮
在荆州遊学毎晨夜常抱膝長嘯　易曰虎嘯風生
寝もたのむに　寝もたのむに　寝もたのむに　寝もたのむに
寝とゝ　寝とゝ　寝とゝ　寝とゝ　寝とゝ　寝とゝ
おさなくおはせしはとすぎてに　さうさうたる
あり　寝ふ　詩　自家おさなくおはせしはとすぎてに
とゝ世なれなるゝ　なれなれしかのおくせさりしに
清あるうさゝびのりうそまつる

おさなき　さうちなの親はなりうとたのひそふうんいりはせなるとあそ
世うおりもうとめと　寝とゝいまゝ先なりはのやゝに　そんてとゝ
いまゝ　雑乃字　幼稚なる義
ゆうもちるゝと
ねなうとゝ　ねなうとゝ　ねなうとゝ　ねなうとゝ　ねなうとゝ　ねなうとゝ
藤なれなおりなれふうもしるふ　今れ為蓋れなりうけ
のうゝ　寝とゝ　ねなうとゝ　ねなうとゝ　ねなうとゝ　ねなうとゝ
二の寝なれとゝ　ねなうとゝ　ねなうとゝ　ねなうとゝ　ねなうとゝ
寝とゝ　寝とゝ　寝とゝ　寝とゝ　寝とゝ　寝とゝ
女なよ似ものとおほ清なて為つゝおりまれ二の寝を
寝しておはせとゝ　寝とゝ　寝とゝ　寝とゝ　寝とゝ　寝とゝ
たちのふんゝ

をとりくてうれおりまうしそれハ　いかとうへれをうふ
よハかきまりくきれ史ゆるよ今ハ異ひのきを御よわうり
おつまあれた友ハかハ主と毋ゆく二の文をもして
何れうこいもりくてとも也
かうちあかりて　友童右面ゆふ新之　文選九思
魏都賦曰有靚薄容注　向日靚憩見也といふ
おもかでりとハ新乃あくちりたる事也
ちよたちあまりこれおりとと　万葉よ母の字をとおりとと
先り友童れ二人れ出ふを生るれと新今をたかるちれ
らたぎふうりうりまりすあまりれちれ母とも
さんとおりに事をこ四れみどのかくおりめすも也
ちれとめよをく　筆ハ秦れ蒙恬が造る所といふ

流殤筆賦曰筆長六尺以應律數絃有十二象河時柱
ゆふ三寸象三才と　凡信通日彈指用骨凡以代指其
音筆〻然
りろ豆にいるし
おやしまそのく　れすりし也　搔鳴と書
引ちろひく出蓋れ四いまをもこと也　粧の字のそふとまりあり裝束成
じ〻物ゆさでやふ笛〻絃ふ
細〻と書ら形ふる〻れ也づうる也
かうこにあくハあるれちすりしふ　筆ち物也
小蓋四大信西ひく友童（まいり）月新てみしれ
月と云ふ代ふ事ひ　しとありうちこをふる事なりしハ
只〻と蓋て藤童と書こいいふ異ひかよりまん

きりうとといふる双紙地也

四のみて蓋

四のみて蓋

ほうかのうせあり人をもあり出のみて

小岡のふかれうせあり人をもあり人をハ中花乃姫天の事也

むしいとこうあさ形して

あるこ市へあるくおりて市れ

四紙のとハ浦舟と四ひりけしてあるくもけうた泊さ

ものをもせしとも

きてあるかるへれ

放童こをハ中乃差とそ岩新乃ゑ市時あひそめあひ

放童こをハ中乃差とそ

比蓋れ通ひのをいふる紙かうて白ゑ〳〵ゑ注さう

れハ注人れ西乃んとおりひ居こうとも

侍従ハまゞうふく

常陸乃うゑ〳〵ゑ比蓋小野ふ

あうとゑて蓋れ文りこせくこうふされ〳〵蓋こ方ゑうとわ

ものをハ侍従よりもしこふ

かこうれ文とそ　蓋れ市れうう文とそりてあうし紙

わうて岩新乃ゑこうりてんゑひふて蓋の行西ひふ

とハ志海　先ゑうとも

あるのれをゞハうう　知てゑの

過ハありれまにかくさゞいふよそんもうちこうゑれすく

かすふ死人れをれ事こ文記日君子有過則謝以實

小人有過則謝以文とうありれまふいふく筆ざる

ハ差の形り小人ハうる過あり紙ハ慶義さんとてあるく

こうゑあうと樂をかうるみかう死よハをゑとも

いとわうくおハをたふ　双紙地也蓋ハわう死はうり人を恥う

しをおほてあるものをゞ猶ふいひ敬されんこと

かりよ慶がわの身とおもひしりて　由て此句ハ葉てふく
無常のとりの我身としめて思ひとりたるなり也
記ごともちつて　そのことに海しうるよそみ情よ消ど
ひき文氏今お見出れハ飛鴻深しきのと名師(めいし)至(しやうにん)人も耻
うれ祖よ古今世俗おりひらんじかへりとなり也
又君の志つげがたど本末流れ清んを立なまし　葉ハ光
源氏の清子にて世よハひびすうりなれ光宗(ぞう)ハ柏木の右衛
積れる子也葉もさつて小少深くて我の文柏木の志づ
源氏の清んとおもやまし女三の宮よかまいりあひそのむくひ
小ぞ今こと思ひをそね事清んよのそりて世ふもやかるさる
るかしおりひ深きあまた也
又まれおもそり思ひ志つて世葉りし　此ごとも自家にやせて

時よ家の尭俗わりねよをしるすまく思ひ深がるる万事
三縁打色れハ萬物んにおもし鍋かすふ之白氏文集曰栄枯事(エイココト)
過都成夢(スグレハスベテノユメナル)といへり過俗云身よかへりてんさて昔
ようはらんるをも見とめすふ葉のんいと多ふとし
そのもて事水とめの語ハせん　論語八佾篇(ハツイツノヘンニ)曰成事不説(ナリシコトハトカス)
遂事不諫(トゲシコトハイサメズ)既往不咎(イニシヘヲバトガメズ)といへり色々ふるすハよきの皆
二たびせどめすしといへり
ちてしふと
小野校遠
世中俗かくいひてもそくハいふたんとそらん
野あいれおもかがおもろくと那ど
松遠
世中よ何おしかつて思ふ人おもかわかくもすめるよ常なる秋
小町
あるハなくなきハ数そふ世中によあはれいつれの日までなけかん

面ぐもりしたるふも　まゝ　世のつゝ蓋れ退き蓋のつゝ
二乃おとゝぶハ　光うり義のみとれ世何と
なりくれもるかゝなとに　そのゝうり白ハ
蓋とハ世を兼うりとも　むまを　なのゝう光うと
なりふうとのふのなハ助絶や
いたをりくあもりもとみるゝん　白ハとゆせ時
ゝり蓋のとりくふあるもとゝとゝんすゝるゝあゝ
ゝとゝたのいゝゝしゝ紀や
ゝうゝごゝちなふ　後言と書くゝうゝごゝちとゝあり
かゞゞゝいゝ義と三國誌蜀蔣琬曰人心不同如其面
面從後言古人之所誡也史記曰汲黯無面從退有後言
いまあゝう面〳〵のゝゝ絶ふゝ　蓋とゝたにけとゝて内

大ゝよのゝゝ義ゝゝの市後ゝ人ゝを世よ紀やゝたりてゝ
ゝゝふのゝを通猛のゝゝりハゝでゝゝりゝく宮かゝ清ゝふ
とゝゝゝゝと

ゝゝれ山星　山絶の嶽れ巻ふゝゝれ山星はゝれおハゝ
世ゝゝあれよ異ゝとゝうかゝし後ハ星れんとゝゝこゝてあゝし
ゝゝけよゝゝしゝゝふゝゝとゝうゝゝゝゝ乃ゝ乃ゝ紀ゝゝ
の山星れ半いゝとわとれゝゝれとも
ゝゝうゝこゝれ年月とて
ゝゝゝゝ

ゆるかしめりの總角(わけまき)れそよう物なりとも

常陸ちとこれおそれいるこころかく　　もとハ陸奥守

かくあり成後よ常陸ちかなり蓮のおくよハ小野乃

姫君よ陸奥て常陸ちを行へごろするひ大わちりな

されりとも

小のうむりハあかぢりぎなりしと　　常陸ちれ小の

方ハ宇治乃うえそれなの小れてされ姫かくなの氏ハ中れ

れ君とそれハをとかの小の方うせのひて塩よりぐそく

の妻小繋りを者ようを蔵ようをせのひて塩よ

常陸ちる小奥せれくよりあらもむきさうめり初めらぐ

ふやうし人なれも蓮れはめ紀のふよ陸よ志もふ

野乃姫君ハりの紀ゆ年ゆり蓮れ姫よなりて

いのをひさうよ陸てりしとれり

かの寺ようあ紀といんハりてこそ　　常陸ちま

姫下宮ふくよ陸ゆ家君と陸ぐくしかれハ蓮

れ寺ようあちといんハ金剛院もかくいりてこと

大和守とまれ陸ゆとく

常陸ちハ蓮れ新ふく

大わちるよ紀りて蓮ハわぐま姫の智子ようれりてさう

ふもをめ紀秋の君とりちあを紀蓮の陸ひんのて

れやふて君てりとと

陸ひ人の陸れりよ

つこの字ハ列の字代用めて

市門乃使人ち別よ陸れりてとも市門のめ陸

ひ人れちをふて君てりとと

三宝れう人ち海姫れ陸たりふ

女二の宮自叙

卿れいは小乃ゝにむ〻の(ひ)ゝ(ば)今ハ三条のとゝやゝたる
桂〻ハ志ゞとゝふんと四季花ハ玲瓏(うゆゝ)とゝ有万葉に玉郷(ゆゝ)帝(ゝ)とゝ
(万葉十一)
玉ゆゝしきの武夕みゝ地(ゝ)ゝふ乃郷(ゝ)と志ゝふ(ゝ)きゝとの
三条乃上志ゝの猛市方遠れ(ゝ)ゝ(ゝ)ゝ(ゝ)ゝ

於表
極楽人身は花宿はさらす花白ひはうれかつるさうきぶ
ちう所ん後はとのたまひて
栴檀
栴檀は香ばしく海てさんぬれちうちんのちれてうんよ
いろかうんもうとおぼし
布施
布施は所ふ者れ報ふとを色かつる花は咲ありう
ものもうるのてちうめいうて
ちううんもおもかるの世中は世界ありしれうれ報者と思うん
けんは業とうせうひ世二てひうてまうわのくぶ
あれうはもうこは報とありとあのうこれ者と思うんまう
今れみうとれうう
あうて世とありひうてて栴人　業と幻ようて仏を言
佛も祈ちんれ雲ふうんれうてるのは　涅槃とう云
の間とを成長ふく不生不滅と翻ぶる時は仏は常住
不変れ覚新ぶれは文よは生滅の相ふ所生れ果報
はうて云ふ生ひ生ひ也法花経は常住霊鷲山と
説ふう又涅槃経城度と翻ずる時は一切所生ふ級
はうく世れ空常と云ふ　きんた色偈は入滅ふ法
花経は方便現涅槃と説ふう今のん仏ふと云
常乃ちうは偈涅槃ふ也
いう志ふの海うこふく　四没偈曰生死海之底心地
観経偈曰無生没在生死海輪廻之途無生期善
逝恒為妙法船能截愛流超彼岸
ま〻移れ浪たうわう　摺厳経曰一切諸字芸皆従
妄想生　普賢観経曰一切業障海皆従妄想生

天台陳如章釋曰眼是大海色是波濤愛此色故
迴復於中　又旦觀曰暴風卒至波如連山　莊子
曰白波如山

馬鳴菩薩偈曰有為
諸法如幻如化三界獄縛無一可樂王位高顯勢力
自在無常既至誰得存者如空中雲須臾散滅
大集經偈曰妻子財寶及
王位將命終時不隨者唯戒及施不放逸今世後
世為伴侶

法の師　物口
雲かゝれ弟口の弟これと家成りけるゝ法華円大
師小野は妹系おれ分生出家修道のよを志せり
なりなれみゝ　源氏ふ
今上と以ゝこれ帝すてに院よりのて白河法皇と
称なゝすゝせれなとハ口おゝうゝす　葉のんゝ今ゝそふ
時よあひ家業なる富世は果報なくあすと思ゝ
三位乃ゝゝれ為系　文の系ゝそに宣旨より三位み
叙ゝれなりゝれなりゝ死葉よ遊てうみのひ為系と
葉乃おゝゝハゝさゝりかゝす異ひのゝひとあり歳代の帝
以為系成ひまゝくあほ　あすよりて四位の侍従
ゝすゝれゝりとも

ふるまちなをてげよ　以後は云云せよたびひるくう
はてうりあれた文の芸も今れわれ女房達は中く
見てまて物しうんとうまりう
一のちるは芸家おりあるを名かりは小坊よりうふ
芸家とは位とを者をのふべきちるとは家殿乃ものれ方
小家成つてすくそきうるを家こて芸家ことり
者乃東は方角れたるとん芸は四時乃角小く万物生
成芸根元也法よ天子れ位をうけく四海とおさめ
民を恵仁政徳澤を施旅ちるとは芸家とは
ゆず也武代乃一のちるは芸家坊小すりるふ也坊とは
東家れおりまれ者芸を物り位を者り給ふ也
三の文は花中書也とて
中務乃れ唐人と中書と云

法ちもれいとすれておつより花を準てくるなは
やされと也
見えをぐかるて
（三条法松殿）
おはおわてはいて山さそ
達はのおかさみかて
この花中小大意とつる三の知るて
やりやれさゆつるふく
古傳曰凡射破窓燈易
入大宗論曰生滅之法皆
滅月穿疎屋爰新成
悉是空生滅輪轉無暫停時相似相續故安
見有實猶如燈焰念々生滅凡夫愚人謂為一焰
事文類聚詩句曰万象風燭九原草露
順ゆ和名よ寂莫と書り又閑の字
いとはりぐくしさ
としさぐくしきと倦り打ひそまりて物さびさるこ

世の中にかこと屋さんれ[illegible]にすん色をすくて　常雪日本紀

よこ[illegible]燈史を打ちくろ[illegible]ろ[illegible]おれハ園より海ふん[illegible]ちと言

世紙姫を月ろれ[illegible]ふさて中ハあり[illegible]れ園ふ[illegible]ろれ海とひん

打ちぬふさひんもあろうあ[illegible]ろとこ[illegible]ろ[illegible]ハ色[illegible]ろ[illegible]

大息ひたるとあ[illegible]

可為痛哭者一可為流涕者二可為長太息者

たとうり物おりふ時ハ大息ひろ[illegible]ことあ[illegible]

ちを歎れ[illegible]ハいきとひたれあ[illegible]ものんく[illegible]ろあ[illegible]

あ[illegible]て海れ流ま[illegible]ひたく海ひ[illegible]ハ[illegible]ひたれあ[illegible]ひ[illegible]

色ハ何ひおとぶれ思ひくれ[illegible]ひこ[illegible]ろ[illegible]

双紙地色第[illegible]れ[illegible]ふ[illegible]おれおとぶ[illegible]ハ思ひて[illegible]

いり[illegible]ひ月新ハれ[illegible]ひたく[illegible]ま[illegible]れ[illegible]ひ[illegible]ろ[illegible]ひ[illegible]中書[illegible]

ハ[illegible]ハ思ひて[illegible]ひ[illegible]ふ[illegible]ひ[illegible]ろ[illegible]ふ[illegible]ひ[illegible]ろ[illegible]

あ[illegible]れ[illegible]ひて[illegible]ひ[illegible]ろ[illegible]ひ[illegible]ろ[illegible]

淡の[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

源ハ[illegible]ひ[illegible]ひ[illegible]史記[illegible]ひ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ひ[illegible]ハ源ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

あ[illegible]ひ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]れ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

打ち[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

化の[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

花香にとまるふ(蝶)
むかふ人をとる香をとめ法法花
たとへ
たとへば
事花香ふとたとふ香れありりてする　漢の武帝
人の玉にいとなりとふ香れ
帯まま人よ家まく出
土まりて帷帳れ前よ独ひとり酒肉とまま也返魂
香を焚ふ香煙乃中ふ美人れ姿乃見えうと漢
武帝伝ふ白氏文集曰九花帳中夜悄々返魂香
降美人魂美人之魂生何許香煙引到焚香處と
いり十洲記曰聚窟洲在西海中洲也此上有大樹似
此国楓香例数百里名烏返魂樹伐取其樹於玉盌
中煮取汁更以微返焚煎之如黒餳今可九名火
驚精香亦名霊晨昊九亦名返生香亦名人鳥精亦名
却死香凡有五名焼之香氣遠聞死尸在地聞香乃
活といりむし司天主薄徐肇と云ふ蘇氏れるふ
德歌とそのよあいりいく和ふく返魂乃香
を国会すとそ香炉れ中ふ一丸をひ移りれを
香れ煙をよのがきり德賀ごるていう東海れ徐
肇わが先昊をんと歌も彩くふ此香煙引等しの
とふる文毋曾高ふれ乃くり德賀ういく死で
八十年よあまりのいんもとびいろ方花長治集よ
ものありりをきりりきりかりきりため
歳乃玄宗皇帝ハ安祿山乱ふ依て蜀の国ふ落の

何よ馬嵬し云事あり て楊貴妃を縊殺されぬ云
宗二てひ初よ場りあひて後よ楊貴妃を忘れ
ぬ所楊通光といひ者ありて蓬萊宮よ行て
楊貴妃よ逢てくそのうち七月七日長生殿乃私語あり
あり事并よ信をうり者て場り事 涙ぬ長恨歌
乃傳てうゆ

再ふ者よ〜むとりこちるひ
いうたきん再ふれ者も摘他ぬ彩んとうてるなよ彩
見八或人の女よあ事又るにとれて後〜ゑとうり
あえ彩くえ彩て
なりなのなすしといふとおすんと
世をえてとうすきうえと 世をえて其世小てしこ云

人と聚会をいひ一念を面せとうるけんを
きあ〜物ぐしうるおり結ぶす 頑嚇としたなりひと白氏
文集よ三四又八閑徒又八技行と書てたなりと後
淋中紀せ世れかど
去世れ因果れかどくあ彩ぬ考る也
おちうきる濃乃川 みとれ淋あくう紀るとハ彩
ぬ行ぬ彩也んの乃ゑよ
修模 お因ゑれ淋るうきゆ
うぬ淋ゆよふくすぐうきんをうとあえし
代ゑれ世紀うぬれやふくるうんハうてさを也
うてハ轉れすくあ事りあ事と
ゆうう四ふみ彩のゑハんいんうれ彩世小も根ぬ寺

万葉

三月ばかりに雲うれ花ちるころ

三条殿うへ　　宇治にて

小野小町

花の姿をいふ今は三条のとゝのことゝ

ゆくかゝるゆゑにとゝまりひとりぬる

ものゝ化を倦して小野小町

浮世はせはし

浮世すでに出家しておハせ

法華経

日薛言如燈炷唯願膏油々々既盡勢不久中

とゝまり難きたとへにはかくのごとくなり

命をいとゝ惜しとおもふ人ハ

身をいたづらにすてゝ

まゐらせ給ふ也

迷この世にあり

佛法をおこなひ給ふ

なり時法ゆゑ

何をもて

とゝ云ふ

かくて今ハ

庄厳論偈曰盛年無患時懈怠不精進貪営衆

支勢不修施戒禅臨為死可吞方悔求修善

停人皆如是唯頼壯膏々々既盡衰老之炷何得久住
李阜吾浄土決曰古人句云莫待老来方学道孤墳
盡是炊手人

うゝふとかくかゝるこゝ　三条殿うゝふもかくのゆひて生涯
れ年かゝらひ学ゝ学ゝ
すてかゝ死とのゝはりて想ゞ法の実と形り
生死はたのゝ法こゝかゝるもたゝ法の実れ法ゝもあるに
ゝ形ゝ人ゝ形ゝこゝ思ひゝ多ひゝ
よおせ成りすゝふ妨ゝき事と思ひなゞ
情思ふの叶ゞかゝりゝとゝ
あひ形ゝれさ度とゝれゝなゝふ　浮舟れ思ひを
ゝ思われ思ひ絶ずとあれい浮舟れ思ひおゝ

は法乃こゝれ数さ多ひゝ法を修行よ法りゝ
なりあゝゝ形ゝゝあゝ形ゝゝきまゝふゝゝんゝ又あゝふ
くあゝふゝふゝふゝなゝふゝあ法ゝ多ゝふ
法損
ゝれこゝりなゝふ意くあひくゝ二相心とこゝびゝ形
なゝすくあゝふくあゝ形ゝなはゆく心思れゝとゝる意ゝと云
形ゝゝゝかゝりひゝ思ひまゝで　やゝゝゝたゝとゝ
ゝゝかゝ度ゝん形ゝひ弱ゝりてゝれゝるゝと
すゝゝ形ゝ形ゝ事ふゝ　修行の間ゝ法勝ゝゝんゝと
感ゝやゝゝゝ

おゝやけゝゝとさかゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝ　業の業い
時代代意と股肱乃良臣とお用めゝ天下ゝ海れ改道
ゝゝゝゝ任ゝてたのゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たゞ〳〵はかくろ〳〵すべ　かくろ〳〵は源のやすとも立てれなふべ
三条院上はせをる人をとゝ伝り紀事れたりふてを小野
ふとおりとて世紀いとひのとゝ
はきあえふ　緑の字えふとゝもむ宿世れ緑ねゝく
引人り二さひ伝るゝのふ
きゝれをひれとの事ふゝ
きゝれ事乃乃はかるゝとかるを行せりてもありんゝを知ふ
いかゝとりゝ笑ゝさ勢のふ　蓋の羽ゝ
えのゞしざゝた　敢乃字をえゝきせゝり者て無ふ
乃んふゝ相童れ世ふえさゝれといるも敢の字ゝ日本紀よ
ふゝえやはゞさゝとゝいひりゝとえゝれと横
ゝ者ゝきれたるんゝ也

ゝふかゝくゝや紀　荘子曰邁仙王行年六十而知五十
九年非　陶淵明飯去来辞曰覚今是而昨非
齊言はは伝法れ名をとそて
仏をはさずゝこ種はそあゝゝ伝ゝかゝみゝなゝゝ因れ
七言れれ七云とゝふゝ之のゝ紀ゝ延喜式ゝゝ選ゝ因
新生かゝ義れ新ふゝくゝゝ也伝ふ者
思ゝゝいむとそいゝねゝゝれはゝ不向て言をのゝそゝく
今ふゝ言ゝすゝ者ゝゝ戒ゝゝ者ゝ也ひとゝゝ
すゝれゝゝれいゝゝさは　聖功徳種ゝて一巻ありゝれ
小野の山里小おはせて時ふゝゝ者ゝ者ゝれゝ者ゝ
ゝ伝ゝんゝ也

はこそうごしゅふか　なるこころをもとめんを禅門のふかき
はとりぬ義ふか　法相乃人なるに六生三界の輪廻は生
れ精魂は三界に流れ無明の眠れ中よりあらはれ善と悪とを分
ち善の善れ夢をみると云ハ獨覺乃意識にて闇昧の意識
ゆえんなるに善悪ハ夢なりこれ乃意識れ善悪
寝ても覚ても共に生死乃中の善悪とふけあり大乗
れ実義ハ涅槃乃悟りふも善とれハ意識れとの分別ふく
迷妄れ夢なり法花経に曰虚妄引之令得出と
ふに生死涅槃同く善悪をこれ一切とこれ
をこれ法の師と　善の師伝れ師
自家をこれ求べし求べし外に求まハいなくを
我が本ハ空性なるの中ふ起る妄想自性なり行ち

ゆりてこゝまんとこれ行者ゆりて仏者れ名れ
悪ハれ善ふいなるさハりなり我　善ハ三業のとれ戒
をうけるふりをとりふ邪ふくとしてこゝはりすて
そりて戒をうけるれ例なり
うゝれぐれ紙ゆく　三業のとうゝ出髪
とねうゝ紙ひて出されとも
こけうゝれ乃庭れこゝれ髪をこゝ結る松風
ハ言ようり或ハよハ仏者とこ掃部るふく
三業れとの言ハ流水なる髪ハ結るれよ髪ハ結ふとハ
史記の夏禹王紀ふ三西さ指ハ髪ふ指
さ明ゝ黄ゝ冬ふ指ふ結ふ結ハはれをゝ祈ひよう
仏者れ小掃をこゝ来ようとこれ日ん之因果経曰過

去諸佛為成佛無上菩提故捨飾好剃髮染衣則
發菩提心今為發故形与一切衆生離除煩悩及習気
菩提の因
はるかに佛の因
はるかに佛の因
はるかに佛

重山長似路迷峯頭猶照在元是住西

めをくさぐさうちて　月将数打也月を志ばしくとする夏
なり伊勢物語小めをくさいなる紀てとりてるられ字お
の字辞乃助也

あかくちお　そうう蓋のふくまとりかやしよいんを
うりあれいて落ちいせさるいはお　長々うくんの鍵を
それうりとふ四く

世の中よりなりやとふまてい　十界れ伝記一ん
乃女原ありとをもんすうせんと有ものれ形よこで
まるそふ海てそれ恨志さるもをよあるんをとお
ふ有ものれ形よ色そらとあふ薄歴とて権大
系の法くをよりさるふ有をを捨ぢ有よあるさる

うあふ無よあるを有無乃二色よかるぐるて志を二色
れ形をを弟さるを中道実相乃妙理空空相の
実辞也とはをを前の
世ふおかをんるいは　伝教乃かくを志をかるれるれ世ふ
立まぢアておをもせんふる
さするして　伶俜　流離　日本紀ふこを
あれぐさもををるれるもあり形ん　飽乃字也
をしづあまを　伝教れ志をとふも形るふある法
源ぢるふおるれるうを部んざるる紀よをてんさとり
志をををるるれ事とる

ひとり子　五拾

仏さまと言ふて云ふて云ふと云ふ雲うれ第四の弁く蓮花
大長れる長浜の流ふまるで絵ゝ変うり云る出せり
或ハ小仏さまをさがれとふ仏弟ゝとふく

あまりかゝりふ人のを　　芝よ二れんあり一よハ仏ゝ
ぢぐまてゝ死人あまりいうせ落ゝ色の欲ゝ人のうまゝ人お
ほ仏人ゝれ世ふおりまきばと見ゝ欲くゝ二よハ蓮大
臣天下れ臣ゝ両をおゝりまきゝふう形ゝ見れを
人ゝゝ申て仏人おゝまきばゝ意ゝ三葉りゝふを
情ゝ人なゝ捨ゝる色ゝふあれハ色ふ
二の長れ市毎乃かれの長　　二れ長とハ今上の女二乃長
義代乃寄れたゝ市いゝとふく蓮れ小の弁ゝ仏

文れ市毎ハ市乃生長れ市ひとゝ義毒れ御ゝゝ今
上いまゝ東京の市ゝ時ゝうまゝりゝ乃ゝ中ゝ市ゝ世落
て後よ女二れ文ゝりをうみと寄ていく行形ゝ失ゝふ
ゝ寄ゝ乃巻よゝ西仏義仏ゝ乃れくゝふかれの長ゝ
先ハ或仏小市寄女ゝ或ゝ娘名郎れ長ゝあふて
きゝいゝとゝの落よゝ将の長ゝいゝと云り但いゝれゝて
知ゝゝ女二の言よゝとれ寄てたゝり形ゝ位ゝる
を者れゝすゝゝれゝりかゝりゝ三楽院よゝゝゝめて
ゝれゝゝ也

長ゝゝちゝ孫ゝをゝげふ　　蓮の長遊おハゝて文いづ
遊ゝゝ知ゝゝ二ゝ楽院よゝりまゝすゝゝゝ女二の文
れ市長の長ゝゝちふゝ又蓮ゝゝに文れ長の市長よ仏蓮

ものしるべき人の世にいでたるは、はかなき事にもあらず。
源氏物語ふるきものがたりの中にもかくのごとくいとこまやかなる物
さとりくんれすぐれたる筆ぶりなるべしとぞ思はるる
こころもとなきものは　かれの歌ども世二の家りをとれまて
相思ひ相あはぬ中にあるこころ　はたてあれとんなるこれをも
うら今と恋ひくらすあつひ　ひとりとなりひとり行んごろ
よ志のふ事く
うよ人も　そよれと紙を世れ常ふいてうくと云ふこうて
いりり稲葉もそよもいふ人の夫をいふ世人今はいろよ
とさればとふんと又長恨歌よ八鼓る破霓裳羽衣と
あり之時八鼓を乱ものふ義こかくふ将れ表をとりるふ
市人ぐ世ふくしを形市事とへて鼓る乱ふるとく

いたくとく常とくこめて　乃ち表の方へ葉をるこに但位の位長
乃ち方ちるへ
むしこれ野ふく小芋かりしのひ　日本書紀ここ
ものこと白玉れ白日の表ふかりしのふ時よれんまりと
て先ものをれ　市女人如雲住寺時方ぐ多こといてう
かるられふくうる人ぶふ　世ふ新ものもちろんふくこの人と
いこも近ちすれく市はまるる時八さ行よ八ふりねこまて
蓋乃ふるこちうろうおりあるぐ今とおります
こも市ふこちをとろくふ　百つ足
さふ神人と神八知ちまりれ　神のひらてと云
ものまこ三年れむしとかほ出て濃と知りのふ紙市
これ人こも見まりて八法ふ神のねまりとく

俗名よねてもぬきて秋袖のをふかうゝひちまさるは
思ひてるさくらよりあれ雪ふかきそれる人を袖をわれそう
いそかれさで　　弥の子くいよくとふんく
あしはるくさあり　　やや
秋ハすくさあるの川文紙や焼捨ふてる月をみく
かゝれわゝぼくこゝきゝゝゝきんとおぐきけさうを
紅乃法眼東京錦れ袈裟や
きる野ゝてあゝりきりてゝて　　橋ちすくふう
野よのゝりのしれ心ふて葉ハ天ゝのゝりと咲
しとあ海のきり天翔ちり
ふんゝきゝてまゝん
葉のちりれあの西方とお
かくて夏ゝ志あのふ西方よかりゝさゝびとゝり

待と俤ゝこゝりすゝしゝる也俤の世ゝさゝびれ遠て仏乃
ゝゝあゝゝ也ゝの出んゝゝこゝきゝせまゝゝきんゝおりゝゝて
葉れ出乃絶ゝんもゝのゝうて芝ふわゝさゝれて世を捨
絶ゝれ也ゝくふくおりふゝ葉のゝ女三の子ゝも
少年の姿ふゝをおゝきゝゝ言乃表れちゝ見れ待
後一人ゝみゝゝり

六抄

雲のうへに笠をよせてのぶ山巻と云ふ物をかりて名を次白言
すでふ高代に帝王の仏法を信ぜずして天の中にあがめ
くあがりあり仏法をうしなはんとをもをもを
うちれみて　白髪部の子高代乃みことの
黄いきんと人　有術験大徳をれいの方れ光り給と
れ母のたゑ牧又ふくあり給ふ　小山信部と云ふ人
ゆり坂よ小山れと人人をて相ひ命学道ゆりし義部の子
若市時よりも死ぬゆゑうあり給ふ
仏乃みのりおのおのを　　必来一代五十年乃法法十
二部教一百法丹部れ契経あり八万四千の法もれ梵分
まちまち形ふ義よ光小射て八万れ経義をひくさのふを

天竺れ人ようふ八万時八教れ法ふと云ふ事
ちふきんふ子の八を生をもをもふ　　人の子高麦八稽
を伊勢物語ふ川れ蜂ふ迷ふ稽とやつをせると
ふり仏言形を八宗乃法ふれ教よ会をてふふ人ふ
法れみのりと只形さうれたをれこを入（きを）（ま
ふ）ふくありをいつ迷れこのりうすぐれたるんとふ
こふ蜂ふよ光ひふ仏法乃四義よあれと只一つ
乃さうにをひわき　　ふ法迷れこのりれふも通すると
生れて取を　　こ八朱の字心せ行ありし取ふれとこれ法
乃中ふ元初れ義ふ法をれて迷ひ法ふ今れ生まを行
ふりゆふ一元乃八　　は初ふ法ふて死を八又ふの迷ひよひれ
で迷ふ子れんをふく法ふ迷ふれ法性ふかふふ

みるりはは紙ん

とも欲のこあ小者とこれてしるつる色色と絵小六絨とた
こ分り眼耳鼻舌身意六根と又は六識と色とナ二入く
ふ色れ色聲香味觸法八六塵よ依ておんとうぐを
うたこ六人の絨り紡寶とうぐひこれて貪者とな
まてとてかて三界小流轉すう紙法色絵よ八ろく
貪墨小迷ふと云のより

きたれとに行るのを　一ん法性の妙理八紙多をとか
まてかよ八形色を去て去ふよりもを法花經
よ八衣れむとう色形ふ貪墨小沢ふと云のより
こうぐしるありてれとく　九傳鄭子養養子皮曰人
心之不同如其面焉吾豈謂子面如吾面乎

法をあているるみちハ
家乃至れ法て佛よりるてハ法をあて法を去ふ人りきろ
一味乃雨うくるるるまれ　法華經曰佛平等說如一
味雨隨衆生性所受不同
大雨乃雨ハわさてとをかとうふ雨まハとのうさ雨く
色ひとりかるる白雨れ
白雨れ色ハひるるを小ふて社のまの雨れちに流ん
雨るれ色より社ゆ法れ雨ぐ雨ふ
八八法を無始無終自生無碍也共妄念煩
惱れ縄り傳ふまて社ん法なくく自生を法をと
三れさ八八欲色無色三界を出離ら色れ色
六塵とさてふ法すくふとハ法雨ふ

いとうるはしきと二なき世界をうるとのハ　倶舎論よ三子
大千世界といふまでとのべらまてうるれとも肉眼ハ
かうるにうるハかるをしるとも
人眼ハ見ることあたはず　法花經ハ中ハ父母和生れ清淨の
肉眼をうるて四方弥勒山峯乃至阿迦尼吒天とうるを
見ることを肉とふハ肉眼よハ何ゝ人乃まかこれ見ける
たるこゝろふあるを
法華ハ今れ天下泥海をこ
ろめすに信乃事こをとすてく行人ゝ乃うて別小仏乃
法乃ふとてよハ及をずたれ信をうゝ（ゝれ人の四小
かをてはうるをを
行と寄をあうる所人れ
以前法華十如是乃中小如是

寺来寛乃理をあうるとえうゝ行未ゝハ未世れ行
さ記也ゝれをれをゝ過去生れる也未世ゝ生れ記
をうるはうゝ過去世ハ為ゝ本ゝ也和ゝうる去世乃
いふ（ゝ本覚実所乃佛也今以理をさうて未世の
行さ記をきうめゝ所ハ始覚乃仏と行う寺覚始覚
と信ハ是ハ是ゝ乃佛寺来寛を
以前ゝ為て源氏物語ハ屋をうゝ実ゝ行有
ゝをうゝ一段ゝをうされハ只門得乃れ法ゝ和
以中小志めゝをうゝ中小も以雲ゝ多ゝ遠ハ人ゝれ得
道をゝ佛法れ寛を書あゝうゝ寄れハ紙して
世ハおこかハさゝも理あゝ未乃世の人ゝ以巻をえ
で仏法乃理をいうをえん換せハ不敏乃事ゝ思也

[illegible]

旨正德四甲午稔霜月日

主周信記之